

# キトラ古墳の調査

—第173-8次・第178-6次

## 1 はじめに

キトラ古墳は、明日香村大字阿部山字ウエヤマに所在する二段築成の小規模な円墳である。1983年以降の調査で、各壁に四神や十二支などの彩色画が描かれていることが判明し、2000年には高松塚古墳に次ぐ我が国2例目の極彩色壁画古墳として特別史跡に指定された。

2011年6月に実施した石室内調査（第170次調査）では、床面の漆喰上で棺台痕跡の存在を追認し、石室石材に描かれた朱線を新たに14本分確認した。また石室の構造や石材の加工状況などにつき、新たな知見を得た<sup>1)</sup>。

今回は、第170次調査の後におこなった2度の考古学的調査（第173-8・178-6次調査）の成果について報告する。

第173-8次調査は、2004年5月に盗掘孔に設置された石室進入装置を取り外し、装置により覆われていた盗掘孔周囲の状況確認を主な目的として実施した。調査期間は2013年2月18日から2月27日である。

第178-6次調査は、2013年度内に予定されていた石室の埋め戻し作業に入る前の最終的な調査として実施し

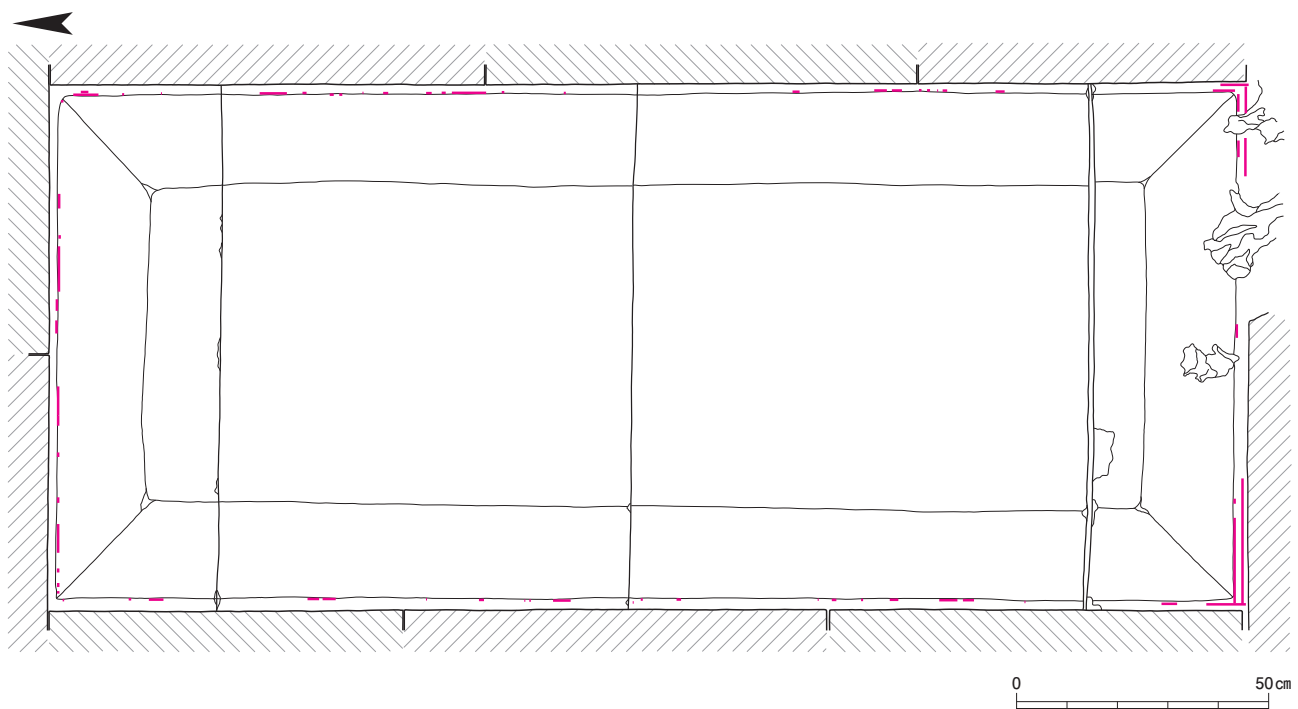
た。第126・130次調査（2002・2003年度実施）の埋め戻し土を除去し、墓道部の3次元レーザー測量をおこなうとともに、墓道部遺構面の状況を再精査した。調査期間は2013年9月17日から9月25日である。

両調査とも、奈良文化財研究所都城発掘調査部、奈良県立橿原考古学研究所、明日香村教育委員会の3者が共同で実施した。

なお、第178-6次調査終了後、2013年9月から10月に文化庁により石室の閉塞作業がおこなわれた。また2013年11月から12月には、文化庁の委託を受け、奈良文化財研究所が石室南側の墓道部埋め戻し作業をおこなった。

## 2 調査成果

**朱線（図Ⅱ-54）** 第173-8次調査で石室内の朱線を再精査したところ、新たに51ヵ所で朱線を確認した。第170次調査の時より石室内が若干乾燥状態にあり、朱線の観察に適していたためである。第170次調査の成果とあわせると、確認できた朱線の総数は117ヵ所になる。そのうち、最長のものは41.2cmで、最短のものは1mmである。同一直線上にのるものを1本として算出すると、今回新たに4本分を追加し、確認できた朱線の合計は24本分になる。



図Ⅱ-54 天井朱線位置図 1:15

**梘子穴 (図Ⅱ-55)** 第178-6次調査において、南壁石南面下辺の西寄り、梘子穴の一部を確認した。場所は、南壁石西辺から30cmほど東で、南壁石と床石の間に詰められた漆喰の隙間からその存在を確認することができた。これまでの調査で一番南側の天井石1の東西両面に梘子穴を確認していたが、今回新たに南壁石南面下辺にも梘子穴が存在することがあきらかとなった。高松塚古墳でも同様の位置に梘子穴があり、床石と組み合った状態で穿たれ、南壁石の開閉に使用されたことが判明している<sup>2)</sup>。今回発見したキトラ古墳の南壁石下辺の梘子穴も、高松塚古墳と同じく、南壁石の開閉に使用されたと考える。



図Ⅱ-55 南壁石南面下端の梘子穴 (南から)

**石室南側の柱穴 (図Ⅱ-57)** 第178-6次調査で、石室のすぐ南にある柱穴SX504・505(第130次調査検出)において、今回新たに柱の抜取穴を確認した。柱穴は隅丸方形で、大きさは55～80cm。深さは、SX505で20cmである。抜取穴の大きさから、柱の太さは10cmほどであったと推定できる。コロレール痕跡との重複関係から、石室を閉鎖した後に穴を掘り、柱を立てたことがわかる。柱を立てた目的は不明であるが、墓道を埋める直前の墓前祭祀に関わるものである可能性が考えられる。同様の柱穴は、高松塚古墳(径50～60cm、深さ15cm)<sup>3)</sup>、石のカラト古墳(径20cm、深さ20cm)<sup>4)</sup>でもみつかっている。



図Ⅱ-56 地割れ痕跡SX506と段状になるコロレール痕跡 (西から)

**地震痕跡 (図Ⅱ-56)** 第178-6次調査において、石室から約2m南にあるSD506が、墓道部を東西に横断する地割れ痕跡であることを確認した。そのため、以下ではSX506とする。SX506は、幅60cm、深さ30cm以上でV字状に開くと考えられ、内部には上部の版築層が落ち込んでいる。SX506の南側では、墓道床面が25cmほど落ち込んでおり、北側から延びるコロレール痕跡が高さを違えて検出された。過去の調査では、このV字状の落ち込みを東西方向の溝と認識していたが<sup>5)</sup>、高松塚古墳の墓道部にも同様の地割れを確認していることから<sup>6)</sup>、地震による地割れと判断した。また、土層観察用に畔として残している墓道部版築層にも地震によると考えられる多数の亀裂を確認した。これらは、高松塚古墳と同じく、90～150年周期で近畿地方を襲う南海地震の爪痕と考えられる。

のような成果を得ることができた。

石室内では新たに4本分の朱線を確認し、南壁石の下辺では、1カ所ではあるが、梘子穴の位置を特定することができた。また、石室南側の柱穴では柱抜取穴を検出し、径10cmほどの柱を立てていたことが判明した。高松塚古墳や石のカラト古墳でも石室南側で同様の柱穴を確認していることから、同時期の終末期古墳の祭祀行為を復元する上で重要な成果である。さらに墓道部では、V字状に開く落ち込みを含む多数の地割れを確認でき、地震により墳丘が損傷していることがあきらかとなった。

### 3 まとめ

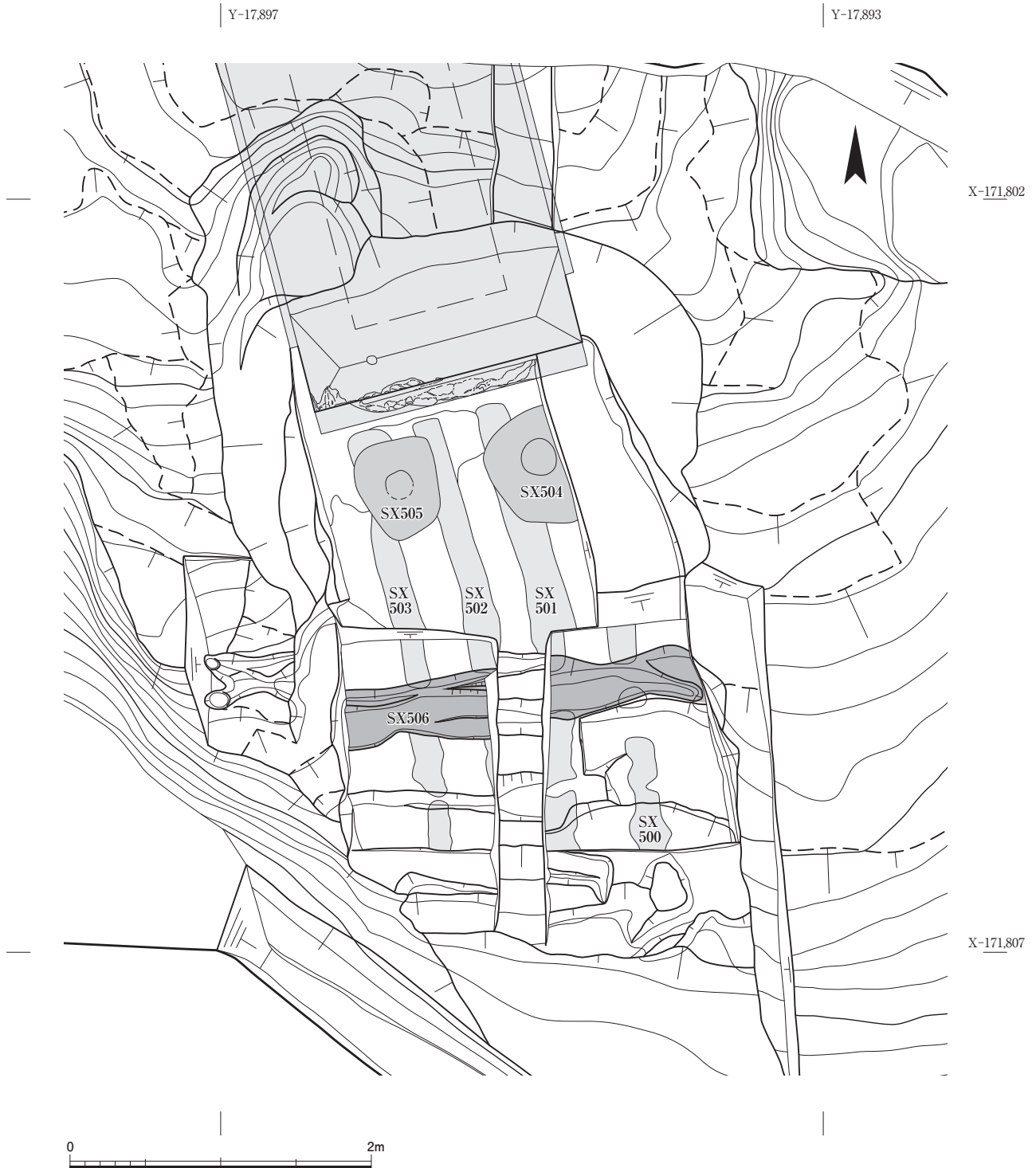
石室内および墓道部でおこなった再精査により、以上

キトラ古墳の墳丘は南側が大きく崩れているが、この崩落の主な要因も地震であったと推測できる。

第178-6次調査をもって、漆喰取り外し後のキトラ古墳の考古学的調査は終了した。今後、古墳は墳丘整備の工程へと進む。これまでの調査成果を総合し、7世紀末の終末期古墳の実態解明を目指すとともに、キトラ古墳の整備活用へ反映させていきたい。(若杉智宏)

註

- 1) 「キトラ古墳の調査—第170次」『紀要 2012』。
- 2) 「高松塚古墳の調査—第147次」『紀要 2008』。
- 3) 猪熊兼勝「特別史跡高松塚古墳保存施設設置に伴う発掘調査概要」『月刊文化財』143号、1975。
- 4) 奈文研『奈良山発掘調査報告Ⅰ』2005。
- 5) 文化庁他『特別史跡キトラ古墳発掘調査報告』2008。
- 6) 「高松塚古墳の調査—第147次」『紀要 2007』。



図Ⅱ-57 墓道部遺構図 1:40